
神が与えた3日間。彼女がくれたクリスマス

ロード 14 / 14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神が与えた3日間。彼女がくれたクリスマス

【Nコード】

N0474B

【作者名】

ロード14 / 14

【あらすじ】

美紀が死んだ…！？幸せなクリスマスを迎えるはずだった啓吾。しかし、3日間という短い間を美紀と過ごす。愛する人に何ができるのか？儚く切ない、奇跡のようなクリスマスでのお話になったらいいなあなんて思っています。

プロローグ（前書き）

初めての恋愛モノです。

これを読まれて皆様の心に何かが残ってくれば幸いです。

プロローグ

美紀が死んだ。

いや……殺された、というほうが的確だろう。

夜、それも一人のときに胸を刺されて、即死だった。
その知らせは美紀が死んだ翌日に聞いた不報だった。

犯人はすぐに捕まったが、もしかしたら防げた悲劇かもしれない。

彼女が殺される少し前に、俺は彼女といたのだから。

せつかくのデートだというのに、急に入った会社からの電話。

なんでも書類不備だということですぐに会社に来いというのだ。

俺は明日にしてもらえないかと交渉をしたが、頭の堅い上司はそれを承諾しなかった。

電話を切って事情を話すと彼女…美紀は

「しょうがないよ。」と残念そうに微笑んでくれた。
俺は一旦会社に戻るからと美紀と別れ、後で美紀の家に迎えに行く約束をした。

別に美紀を家に送ってからでも良かったのだ。
良かったのに……

美紀はその帰り道で襲われたのだ。孤独な死だ…。

正直に言おう。俺は通り魔のやつを殺してやりたい。

そしてあの時美紀を家に送って行かなかった自分が憎い。

あの時、仕事が終わって美紀がまだ帰ってきてないと聞いて、俺は町中を探し回ったが美紀を見つけることは出来なかった。

雪がしんと降り続ける17日、クリスマスイヴ1週間前日。

それは美紀の命日となった。

これは、俺と美紀が過ごしたクリスマスの3日間だけの、儚く短く、そして俺の人生で最も愛を感じた3日間だけの話だ。

第1話：凶報（前書き）

かなり間が開きました^^・すいません。ちよくちよく載せていきます

第1話：凶報

美紀が死んだという知らせを聞いたのは、翌日の朝のことだった。

いくら探しても美紀を見つけすることは出来ず、疲れきった俺は2時頃に家に着いてパジャマに着替えるとベッドの上に倒れこみ溶けるように眠りに落ちていった。

翌日、つまりは美紀の死を聞いた日の朝、寒気がして俺は眼を覚ました。

掛け布団がベッドから落ちている。

どつりで寒いわけだ。

ふと視界に入った枕元では水色のランプがチカチカしている。その光源を見てみると俺の携帯には着信履歴が何件も入っている。そしてそのすべてが美紀からのものだった。

「ああ……美紀からの履歴がこんなにもあるし……。怒ってんのかなあ……結局美紀にあの後会えなかったし。くっそ、なんでデートの日に会社から仕事が入るんだよ!!」

ぶつぶつ言いながらも俺は携帯をかけなおす。

プッププッププ。

携帯のプッシュ音がリズムよく携帯から発せられる。

プルルルル。プルルルル。プルルルル。

ガチャ。

「もしもし、美紀？昨日はごめ……」

俺はまず美紀に謝まろうとした。

しかし電話の相手は美紀ではなかった。

「もしもし！？啓吾さん！？啓吾さんですね！！あ、私美紀の母です！！美紀が……！！美紀がぁ……！！」

電話の向こうには美紀ではなく、美紀の母親がいた。かなり取り乱している。

俺は驚いた。

美紀とは付き合ってから2ヶ月あまりしか経っていないし美紀の母親と会ったのはほんの1、2回程度。

ましてや父親とは面識もなく、父親のほうも俺のほうを知らないらしい

「お……落ち着いてください。美紀がどうしたんです！？美紀に何かあったんですか！？」

美紀の母親の取り乱した声を聞いて、美紀にただならぬことが起きたのがわかる。

「美紀が……美紀が死んじゃったのお……！！」

「え……？」

あたりが急に静かになった気がした。

俺の頭の中は今、美紀の死の報せによって完全に機能が停止してしまっている。

「ちよつ……あ……それ……本当……なん……ですか？」

情けない声だがなんとか振り絞って美紀の母親に尋ねる。

ウソでした、といって欲しい。

手は震え足には力が入らない。

しかし美紀の母親の返答はあまりに残酷で、無情なものであった。

「殺されたの……通り魔に……犯人はまだ捕まってないけど……あとで……線香をあげに来てやって……」

そう言い残し電話は切れてしまった。

俺はしばらくベッドの上で硬直していた。

心臓がバクバクいつて胸のところが熱い……

この季節には似合わない汗を大量にかいている。

思考は完全になく、ただただボーッとしているだけだった。

俺は服を着替えようとのろのろとベッドから降りる。靴下を裏表逆に履いたりして随分と着替えるのに時間がかかったが、車のキーをもって部屋を出ると鍵をかけるのも忘れ車へと向かった。

（ウソだ……美紀が……？ウソに決まってる……）

そんな淡い期待思いながら、車のキーを挿して車を出す。

ただうつろな目で美紀のうちへ向かって車を走らせた。

2、3度他の車に接触しそうになったが、俺はそんなことお構い無しにただただ無心に……いや、美紀の顔を思い浮かべながら、車を走らせた。

だがその反面、美紀の家に行きたくない気持ちもあった。

美紀の死を確信しなくなかったからだ。

俺の心の中にある二つの矛盾した気持ちを抱えたままいつの間にか美紀のうちへと着いていた。

すでに通夜の準備がされていて、美紀の家の縁戚の人などが数人集まっていた。俺は心臓がものすごく早く鳴るのを感じながらインターホンを押す。

ピン……ポ……ン

ゆっくりと押してゆっくりと離す。

押してしばらくすると美紀の母親が出てきた。

今は泣いていないが目を真っ赤にして泣き腫らした跡があった。

「……どうも」

俺はとりあえず挨拶をする。どう声をかけていいかわからない……

「おはようございます。寒かったですしょう？あがってください。美紀に……会ってやってください」

声はさつきよりもしつかりとしていた。しかしトランプで作られた塔のようにすぐにも崩れそうな感じだった。

俺は親族の集まる部屋へと通された。

そこには美紀の親族が何人かいた。

美紀の叔父叔母にあたる人、従姉妹であろう女の子、みんな俺のほうを見ている。

それもそのはず、皆が喪服やら着ているのに俺だけ私服なのだ。

正直、かなり浮いていた。

「みなさん、こちら、美紀の……彼氏の啓吾さんです。」

正直俺を紹介されても困る。なんて言えればいいんだ？

第一俺は親族じゃねえのに。

「どうも…初めまして。西園啓吾と言うものです。」

とりあえず自己紹介だけしておいた。皆軽く会釈をし、俺も会釈を

し返した。

俺は美紀の母親に皆に聞こえないよう囁いた。

「あの……美紀は？」

「ああ……こちらです。それでは皆様……。」

そう言っただけで歩き出した美紀の母親。

俺はまた会釈をし部屋を後にした。

美紀の母親は廊下の奥の襖の前で止まった。

「ここです……。中には夫がいますので……。」

俺は心臓がこれ異常ないほどバクバクしていた。震える手でふすまを開け、部屋の中を見る。

静かだった。

まるでここだけ時間が流れていないような……。

いや流れてはいないのかもしれない……少なくとも目の前に横たわる美紀には……。

美紀は布団の中で静かに、永い眠りについてた……。

決して目覚めることのない眠りに……

美紀の枕元には美紀の父親であろう男性が座っていた。
俺は静かに美紀に近寄った。

静かなこの部屋では畳張りの床でも、ミシミシと軋む音が聞こえてくる。

美紀の父親が俺のほうを見て軽く会釈をした。
俺も正座をし、会釈し返す。

「初めまして。美紀さんとお付き合いさせていただいております、西園啓吾という者です。」

「君が…啓吾君か。先ほど家内から聞いたよ。美紀の彼氏だったね。美紀に…会ってやってくれないか？」

そういつて美紀の父親は席を外した。ふすまを閉めると一層静かになった気がした。

俺は美紀の顔に被せられている布をそつと外した。

…綺麗だった。肌は雪のように真っ白で、雪のように冷たかった。目を閉じてただ眠っているように見える。今にも目を覚ましそうな…。本当に死んでいるのか疑わしいほどだ。

……しかし息はない。もう永遠に目覚めない。

不思議と、涙は流れなかった。

いや、流すまいとしていた。

人前で泣くなんてことは俺はしたくない。

人は悲しみに打ちひしがれている人を慰めるが、それは本当の悲しみを知らずに慰めているのだからうっとおしい以外なんでもない。俺はそれが嫌いなのだ。

だが目の奥は熱く、鼻の奥にツンとした何かがこみ上げてくる。

美紀の部屋を後にし、俺は少しだけ外に出た。

涙を流さないよう、上を向いていたら少しは落ち着いた。

外の乾燥した冷えた空気は俺の肌に突き刺さるような冷気を感じさせた。

「さぶっ……」

一言、それだけ言っただけのポケットに手をつ突っ込むと、何か入っていることに気が付き取り出した。

煙草だった。

2、3本、吸っただけのまだ新しい煙草だ。

カートンで勝ったときの百円ライターが中に入っている。

俺は煙草をくわえ、ライターで火を点けた。

そっぴいえばあの時以来だ……。

煙草を吸うのは……。

空中に静かに漂う煙を見つめながら、美紀のことを思い出す…。

「え、煙草やめろ？なんで？別にいいじゃん。」

俺はデートのときに禁煙したら？と美紀に言われた。
反対という反対はしてないが聞くと美紀は語り始めた。

「だって煙草って健康に悪いし、そもそもお金を煙に変えてるだけじゃん？意味ないよ。」

そうやって美紀は俺の口にくわえられていた煙草を取り上げて火を消した。

「大丈夫だって。それに美紀の健康が悪くなるわけじゃないし。」
ソレを聞いた美紀はまるで分かってないわね、という様なため息をつく。

「あのね、煙草の副流煙は主流煙より健康に悪いの！！だから、私の健康に悪いの！！」

「わかったわかった。煙草吸わない！」

「うん。ならばよろしい！！」

そういつて美紀は微笑んだ。
釣られて俺も笑い返す。

「それにさ、煙草はキスの味が悪くなるんだよ？」

そう言つて美紀は不意に俺に口付けをする。
突然のことで俺は呆然としていた。

「んゝ苦い。煙草の味がする。ね？煙草やめるでしょ？」

美紀は赤くなっていた。

俺はそんな美紀が可愛く思えてもう一度美紀と口付けを交わす。

その日は2人とも初めて口付けを交した日だった…。

そんなことを思い出していると煙草はもうほとんどなかった。

俺はいつの間にか涙を流していた…そして声を押し殺して思いきり泣いた。頬に流れる涙は外に出るとすぐに冷やされる。それでも涙はとめどなく流れた。

クリスマス、6日前のことだった…。

第1話：凶報（後書き）

ガラにもなく恋愛ものです。まだまだ未熟ですが感想などくれたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474b/>

神が与えた3日間。彼女がくれたクリスマス

2010年10月11日00時08分発行